

【今日の一押し本】

君たちはどう生きるか 吉野源三郎 岩波文庫

ニュートンは林檎が木から落ちるのを見て万有引力を発見したと聞けば、普通の人では思いつかず、「天才」ならではの発見だと思えますが、落ちる高さを10メートルを100メートルにしたら、1万メートルにしたら、月と同じ高さから落としたりと想像を進めてみれば私たち凡人でも「あ〜なるほど 万有引力！」と思えます。

今コミック版が大ヒットしているようです。私は岩波文庫を読みましたが、コミックで読むのもいいと思えます。本校の図書館にもあります！この本が初めて出版されたのは1937年、第二次世界大戦前です。盧溝橋事件が起こり日中戦争が始まりました。ヨーロッパではムッソリーニやヒトラーが政権を取って、ファシズムが世界的な脅威となり、世界大戦の危険が暗雲のように全世界を覆っていました。

作家で政治家でもある山本有三が編纂した「日本少国民文庫」（全16巻）の最後に配本されたのがこの「君たちはどう生きるか」でした。「少国民」という言葉は、日中戦争から第二次世界大戦までの日本において用いられ、「銃後に位置する子供」を意味します。

当時、日本は軍国主義の勃興とともに言論や出版の自由は著しく制限されていました。山本有三は、少年少女は次の時代を担う大切な人たちであり、偏狭な国粋主義や反動的な思想を超えた、自由で豊かな文化があることを、少年少女に伝えておかなければならないと考えこの文庫が編纂されました。そして「君たちはどう生きるか」は、その中で倫理・道徳を扱うことになっていました。

この本は、題名のとおり、「人としての生き方」をテーマにしています。このようなテーマの場合、往々にして「〇〇すべき」とか「〇〇してはならない」とかの押しつけや上から目線の内容になるものですが、この本は違います。

普通のどこにでもいる中学生、高校生世代の少年が日常生活の中で経験する事柄を手がかりとして考えを深めていき、生き方を探っていくものです。

冒頭のニュートンの林檎の話では想像力の大切さを解りやすく説いています。コペルニクスの「地動説」の話からは、「自分を中心とした世界像から、世界の中での自分の位置づけという考え方への転換」について思いをいたし、人が生きていく上で、自分中心主義からの脱却がいかに重要で、かつ、困難なことかを伝えてくれています。

中でも、私が皆さんに特に読んで欲しいのは「雪の日の出来事」です。誰にでも、自分が弱く臆病であるため、思い出したくも無いような恥ずかしいこと、卑怯なことをした経験があると思えます。そういう経験を積み、克服することにより成長し、「どう生きるか」を身体で覚えることができる。そのことをこの本は教えてくれます。

今日は本校の第33回生の卒業式。

巣立っていく皆さんにお薦めします。



卒業おめでとう！